

れ、現存していること。

八 相良頼喬公の父君、相良頼寛公御危篤の時は、長崎から中国人医師彭川入徳と西三伯が招かれて治療していること。

以上のことを考えあわせてみると、「お世継ぎを得るための非常手段として、南蛮流外科による帝王切開が行われ、お世話になったキリシタンには弓をひかなかった」と思われるのである。

(熊本県人吉市)

## 広島地方の藩医たちとその業績

江川 義雄

幕藩体制は武士社会を主体とする封建社会構造の上に成り立ち、その政治行政機構の中では、近代社会にみられるような組織化され、活動的な医師の職業集団は存在せず、したがってそれらの学術活動としても、特記されるべき業績も認められない。全国的規模からしても、各地域・各藩においても大同小異といえるであろう。

私は広島地方において、元和五年(一六一九)から明治初期の廃藩置県頃までの約二五〇余年間の広島藩藩医の概況を、その歴史的背景から考察してみたい。

広島藩は安芸一国と備後半国を領有した外様大藩である。福島正則の除封のあと、和歌山から四二六、五〇〇石の広島城主として、浅野氏が入封された。浅野氏の治世は明治維新まで続いた。

歴代藩主は文教に心を用い、有能知名の学者を登用した。藩主の前任地である和歌山領有時代から、当時高名であった儒医・堀杏庵や黒川道祐を用いた。

その後、藩医たちが医療界に大きい影響力を与え指導性をもったのは、幕末から明治維新の激動期であった。その歴史的転機の十字路に主役を果たしたのは、藩医たちといえる。

当地方における代表的藩医達の系譜をたぐりつつ、彼等の果たした役割について考えてみたい。

(広島県佐伯郡)

## 江戸後期芸州山県郡の牛痘接種の研究

末田 尚

一  
一七九七年(寛政十年)ジェンナーの発見した牛痘接種法の情報は、十九世紀初頭より次々と我国にも伝わり、たびたびの蘭館医等の種痘不成功にもかかわらず、蘭方医等は活性痘苗を待った。一八四九年(嘉永二年六月)モーニッケの種痘成功により、肥前・長州・京阪・江戸の蘭方医は、牛痘接種、種次に成力した。

吾芸州は、佐渡の長野秋帆の痘苗を、三宅樵水、津川元敬、後藤松軒等により種痘し、同志一〇名余が蘭学禁止令下に秘かに種を次いだ経緯は、三宅春齡の「補憾録」に詳述してある。山県郡は、同書によれば辺境の地であるが、児玉涼庵、有成父子の種痘実験(嘉永三年五月)を称賛しており、また地方史学家名田富太郎は、穴村児玉俊造の愛